

第7回研究戦略としてのケース・スタディ

——データをどのように分析するか——

横 澤 公 道

1. はじめに

今回は、様々なデータ源から収集した定性データをどのような手順と手法で分析をして理論を構築または実証していくのかについてGlaser and Strauss (1967) とYin (2018) を比較しながら検討をしていきます。定性データの分析について解説するにあたりまずデータ分析の重要な概念であるコーディングについて説明をすることから始めます。

質的研究においてコーディングとは、データに「コード」を付与する作業のことを指します。コードは、データの特徴や意味を象徴する単語やフレーズ、あるいは短い文章のことです。例えば、あるインタビューで「上司が相談に乗ってくれたので安心した」という発言があった際、これに「上司の支援」「安心感」といったコードを付けることができます。

インタビュー記録や観察メモ、自由記述アンケートなどのデータは軽く数十ページに上ることがあり、膨大な量のデータをそのまま扱うことは困難です。そこで、研究者はテキストの一部にコードを貼り付け、データを圧縮し整理していきます。この作業がコーディングです。

コーディングの最大の目的は、データ全体の意味を損なうことなく、その量を整理・圧縮し、分析可能な単位に落とし込むことです。これにより、研究者はデータ全体を見渡しながら、テーマやパターン、概念を抽出できるようになるのです。それではまず、グラウンデッドセオリーアプローチのデータ分析について解説を行っていきます。

2. グラウンデッドセオリーアプローチにおけるデータ分析

グラウンデッドセオリーアプローチにおいてデータ収集と分析のプロセスを表すのに、継続的比較法 (Constant Comparative Analysis) という概念を紹介しています。これは、データ収集とデータ分析を行ったり来たりすることでデータから課題を、課題から仮説を、仮説から理論へと進めていくプロセスになります。例えば、初めてフィールドに出て、インタビューを行ったとします。そこから、その組織が抱える経営課題が明らかになりましたが、その時はそこで時間切れになってしまいました。そのデータを家に持ち帰り分析をしていったところ、情報提供者から提示された経営課題の多くは研究が多くなされている一方、一つの経営課題については、新しく、また直観とも異なる面白い仮説が含まれていることに気づきます。そうしたら、

今回のインタビューでは同じ情報提供者に対して、この経営課題に絞ってより詳細な聞き取りを行いさらにデータを収集するという手順を踏みます。こうしたデータの収集と分析を反復する作業は、アンケート調査のような、仮説を構築し、アンケート用紙を作成し対象者に配り、回答を分析し仮説を実証するというように、直線的に進めるのと大きく異なる特徴があります。

2.1 コーディングプロセス

Glaser and Straussは、グラウンデッド・セオリーアプローチを提唱する中で、質的データを理論へと昇華させるための手法として、コーディングをオープンコーディング (Open Coding) と理論的コーディング (Theoretical Coding) の二段階のステップに分けて説明しています。

オープンコーディング

オープンコーディングとは、収集したデータを細かく分解し、意味のある概念やカテゴリーにラベル付けしていく作業をさします。この段階では、先入観や仮説にとらわれずにデータに忠実に、現象の多様な側面を抽出し、比較・対比を行いながらカテゴリーを生成していくことが求められます。この手法を大学や企業で行われているブレインストーミングと比較すると理解しやすくなります。一般的なブレインストーミングではまずアイデアや情報の断片をカードや付箋に書き出し、共通点や関係性に基づいてグループ化していきます。グラウンデッドセオリーアプローチのオープンコーディングもこれに似ており、データ中の具体的な出来事 (インシデント) にコードを付け、意味や特徴に基づいてカテゴリーとしてまとめる作業を行います。

インシデントの比較

オープンコーディングにおいて重要なのは、インシデントの発見と比較です。Glaser and Strauss におけるインシデントとは、インタビューの一節、観察記録中の行動、フィールドノートの記述など、理論的に意味があると判断された具体的なエピソードや断片を指し、理論的カテゴリーを形成するための素材となります。インシデントがグラウンデッド・セオリーアプローチにおける分析の最小単位であり、インシデントを比較し、その共通性を抽象化して付与した短いラベルがコードです。

例えば、製造現場において、「新入社員が改善提案を出したが、上司が却下した。それ以降、その社員は提案を出さなくなった」といったようなものがインシデントになります。こうしたあるインシデントにコード (「例：失望と沈黙」) を付け、前に出てきたインシデントを比較し何が同じか、そして異なるかの分析を行います。最初はコードをつけるだけですが、次第に比較・統合され、理論的構造が明らかになっていきます。Glaser and Strauss は、インシデントを比較することを通じて、共通性・差異性・構造的なパターンを見出していくと述べています。具体的には：

1. 同じコードに属する別のインシデントを比較

→ まず、複数のインシデントを収集し、それぞれにコードを付与します。例えば、「従業員が意見を出すのをためらう」というインシデントが複数存在する場合、それらに「意見抑制」「否定的反応への恐れ」といったコードを割り当てます。次に、これらのコードを比較し、共通して見られる特徴や背景要因を抽出します。その結果として「抑

圧的リーダーシップ」や「心理的安全性の欠如」といったカテゴリーを生成します。

2. 異なるカテゴリー間でのインシデントの比較

→ 次に、異なるカテゴリーに属するインシデント群を比較します。例えば、「発言抑制」に属するコード（例：心理的萎縮、恐れ）と、「積極的提案」に属するコード（例：主体的行動、参加意欲）を比較し、何がその違いを生み出しているのかを分析します。この比較を通じて、行動を分化させている条件（上司の対応、組織文化、個人特性など）が明らかになります。

3. 比較しながらカテゴリーの定義と範囲を洗練

→ インシデントを比較していく中で、「これは別カテゴリーにした方がよい」「このカテゴリーは広すぎるかも」といった理論的判断を加える。

カテゴリーの創出とプロパティ・ディメンションとの統合

オープンコーディングの次のステップは、コードを整理してカテゴリーを作り、さらにプロパティやディメンションと統合することです。新しい用語が多く出てきたので以下の表で用語、定義を参照しながら進めてください（表1参照）。

表1：コーディングに関連する用語の整理

用 語	定 義	例
インシデント (Incident)	分析の最小単位であり、データ中の具体的な出来事や断片。理論的に意味があると判断されたエピソードや行動を指す。	「新入社員が改善提案を出したが、上司が却下した。それ以降、その社員は提案を出さなくなった」など
コード (Code)	インシデントに付けられた意味づけラベル。	「黙る」「提案する」「拒絶される」など
カテゴリー (Category)	複数の類似コードを統合した、より抽象的な概念。	「発言行動」「上司への適応」など
プロパティ (Property)	カテゴリーが持つ特徴・側面。	発言の様式、頻度、動機、リスク認知度など
ディメンション (Dimension)	プロパティの幅（連続体）を示す概念。	様式：直接的 ↔ 間接的、頻度：頻繁 ↔ 稀、動機：内発的 ↔ 外発的、リスク認知：低 ↔ 高

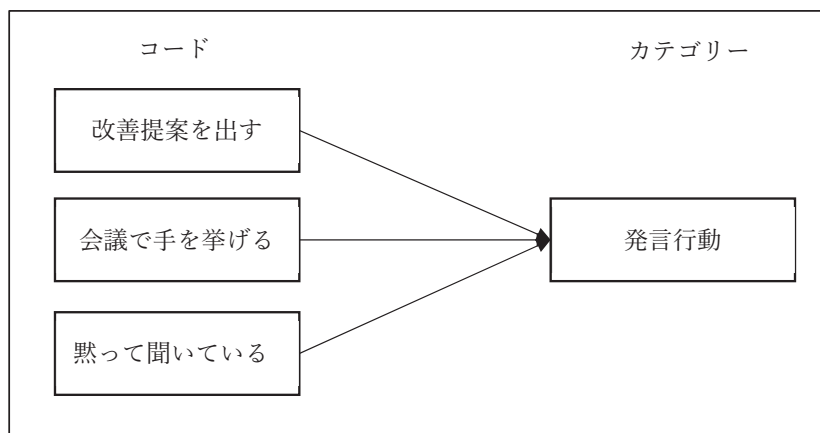
Glaser and Strauss (1967) を基に筆者作成

まず、データ中の発言や行動などの「インシデント」にコードを付けて分類していきます。この段階では、多くのばらばらのコードが生まれます。次に、それらのコードを意味や共通性に基づいてまとめる作業を行います。具体的には、似たような行動や発言をグループ化し、何を示しているのかという観点から抽象化して「カテゴリー (category)」を作ります。

例えば、「改善提案を出す」「会議で手を挙げる」「黙って聞いている」というコードは、「従業員の発言行動」というカテゴリーにまとめられるかもしれません（図1参照）。

さらに、各カテゴリーの特徴を表すプロパティ (Properties) を整理し、その幅や程度を示

図1：コードとカテゴリーの関係性の例



筆者作成

すディメンション (Dimension) を設定することで、カテゴリーを立体的に理解できるようにします。ここでいうプロパティとは「カテゴリーの特徴や性質」のことで、例えば「発言行動」というカテゴリーには「頻度」「様式」「動機」「リスク認知度」といったプロパティがある可能性があります。一方、ディメンションとは、そのプロパティが持つ幅や程度を示すもので、例えば「発言の様式」というプロパティの場合、「直接的」と「間接的」の間でどの程度かを考えることで、行動の違いや傾向をより細かく理解できるようになります。

「発言行動」のプロパティとディメンションの例：

- 発言の頻度 (頻繁 \leftrightarrow 稀)
- 発言の様式 (直接 \leftrightarrow 間接)
- 発言の動機 (内発的 \leftrightarrow 外圧的)
- リスク認知度 (低 \leftrightarrow 高)

理論的コーディング

オープンコーディングが終了した後、次のステップとして理論的コーディングを行います。理論的コーディングとは、すでに抽出されたカテゴリー同士の関係性を明らかにし、理論的枠組みとして構造化する作業を指します。具体的には、各カテゴリーがどのように相互に影響し合い、因果関係や条件・結果のパターンを形成しているかを分析し、カテゴリー間の結びつきやメカニズムを整理して理論モデルとして表現します。

オープンコーディングがデータを細かく分解してコードやカテゴリーを形成する段階であるのに対し、理論的コーディングはそれらのカテゴリーを統合し、全体として意味のある理論構造を構築する段階といえます。

カテゴリー同士の関係づけ

理論的コーディングを行う際、再度、分析の最小単位であるインシデントに戻り、そこに因果関係を示すものがないかを確認めます。例えばインタビューから見つかったインシデントから「発言行動」は、「上司の受容性」といった他のカテゴリーとも関係する示唆が得られたとします。具体的には、あるインタビューでは、「上司が『そんなの無理に決まってるだろ』と言ったときから、もう誰も何も言わなくなった」というインシデントが記録されていたとします。このインシデントには：

「上司の否定的反応」というコード

「発言行動の沈黙化」というコード

が同時に含まれており、これらが異なるカテゴリーにまたがる形で関係していることを示唆します。ここから以下のような理論的關係性が見えてきます。

上司の受容性の程度	従業員の発言行動の特徴
高い（例：傾聴、感謝、取り上げる）	発言頻度が高く、自発的、創造的な内容が多い
低い（例：無視、批判、報復）	発言は稀で、匿名、表面的、または完全な沈黙

これにより、「上司の受容性は、従業員の発言行動の様式と頻度に影響を与える」という因果関係、つまり仮説的命題が生成されます。このような命題は、インシデントの比較→カテゴリー形成→カテゴリー間の関係探索というGlaser and Straussの方法論的流れから自然に導かれます。このような関係性がさらに増えていくと、例えば次のような中核的構造が浮かび上がることもあります：

組織内の「心理的安全性」が、「上司の受容性」「仲間の反応」「制度的保護」など複数のカテゴリーによって支えられ、それが「発言行動」や「改善提案行動」といった下位カテゴリーに影響を与える。この段階では、カテゴリー間の関係性が単なる並列ではなく、階層的・因果的なネットワークとして組織化されていくことになります。これこそが、Glaser and Straussが言う「理論の統合（integration of theory）」のプロセスです。このように、インシデントの蓄積と比較を通じて、カテゴリー同士が有機的に結びつき、説明力を持った理論的構造が浮かび上がっていくことが、Glaser and Straussの強調した「理論生成（theory generation）」の真髄です。

3. Yinのアプローチにおけるデータ分析

グランデッドセオリーアプローチでは、収集したデータ全体に目を通し、理論的に意味がありそうなデータに対してコード付けを行い、そこからカテゴリーや理論を構築していきます。

一方、Yinのアプローチでは、分析の起点が異なります。Yinは、ケーススタディの準備段階で作成するケーススタディ・プロトコルに記載されたリサーチクエスションを出発点とし、その問いに答えるためのデータを探索することから始めます。ただし、Yinは次のように助言しています。

いきなり大きなリサーチクエスションに答えを見つけようとするのではなく、それを構成す

る小さなりサーチクエスションに分解し、それぞれについて答えを探すことから始めるべきです。そして各小さなりサーチクエスションに対して仮の結論を導き出しつつ、その結論がどのようなデータに基づいているか、読者が検証できるようにデータを提示することを常に意識します。

このプロセスを繰り返すことで、最終的に大きなりサーチクエスションへの答えに至るのです。

3.1 データで遊ぶ (Play with data)

Yinはまず初めに何か見込みのある新しいパターン、洞察、概念を探したいならデータで遊んでみることを推奨しています。データを捜査しているうちにこうしたものが見つかることがあります。文字起こしをしたインタビューデータを並べてみる。そのほかにも

- 表を作ってみる、
- マトリクスを作り証拠となるデータを入れてみる、
- フローチャートやグラフを作ってみる、
- 異なるイベントの出現頻度表を作ってみる、
- データを時系列に並べてみる、

などの分析を行うことで洞察が得られることがあるのです。

3.2 分析戦略

Yinのアプローチにおいては、事前に用意したリサーチクエスションや理論的命題を手掛かりにデータ分析を進めることが基本的なスタンスになります。一方で、データ起点の分析も重要な戦略として位置づけられています。グラウンデッド・セオリー・アプローチに見られるような、データへのコード付けや統合の手法は、すべてのケーススタディに応用できるとされています。こうした帰納的な戦略は、事前に用意した理論的命題とは異なる追加の洞察や、新たな概念間の関係性を発見することにつながります。Yinは、データ分析に対して以下の四つの戦略を提案しています。

I. 理論的命題に依拠する (Relying on theoretical propositions)

最も一般的な戦略であり、研究開始時に立てた理論や仮説に基づいてデータを整理・分析する方法です。事前に設定した研究目的や質問、分析の焦点が、理論的枠組みによって方向づけられます。例えば「心理的安全性がチームの生産性を高める」という命題を立てた場合、その関係を検証するためにデータを読み解きます。

II. データから積み上げる (Working your data from the ground up)

これは帰納的アプローチであり、理論に先立ってデータそのものを詳細に検討し、そこからパターンや意味を見いだす方法です。グラウンデッドセオリーアプローチに近く、現場の観察や記録から直接的に概念や関係性を導き出すことに重

点を置きます。既存研究が少なく、仮説が不明確な場合や、新しい現象を探索する段階で有効です。

Ⅲ. ケースの記述（Developing a case description）

ケースそのものを豊かに描写し、理解や解釈を深める戦略です。特に探索的なケースや複雑な事象を扱う際に有効で、理論検証よりも全体像の構築に重点を置きます。この戦略では、ケースの包括的なストーリーやタイムラインを描き、後の分析の土台を整えます。

Ⅳ. 妥当な対抗仮説との比較（Examining plausible rival explanations）

この戦略は、他に妥当な説明が存在しないかを積極的に検討するものです。ケースの記述から浮かび上がった自分の結論を正当化するのではなく、「他の説明でこの結果を説明できるか」という視点でデータを分析します。統計分析のように数値によって命題の正誤を判定できない定性データを扱うケース・スタディにおいては、こうした視点が研究の信頼性や説得力を高めるうえで重要になります。Yinは、この対抗仮説を「クラフトライバル（Craft rivals）」と「リアルワールドライバル（Real-world rivals）」の二つに大別しています。クラフトライバルは、社会科学研究や教科書で古くから議論されてきた類型であり、理論的・方法論的な標準知識に基づいて想定されます。一方、リアルライフライバルは、現実の調査現場で遭遇する多様な代替説明であり、事前に特定しておくことが望ましいものの、データ収集の過程で初めて明らかになる場合もあります（表2を参照）。Yinは、対抗仮説を調査設計の時点から想定し、データ収集や分析の計画に組み込むべきであるといいます。さらに、事前に想定した対抗仮説に加え、現場で新たに見えてきたものにも柔軟に対応し、それらを棄却できればできるほど、研究結果の妥当性は高まるのです。

3.3 ケース・スタディの主要な分析戦略

Yinのケーススタディ研究における代表的な分析戦略には、パターン適合、説明構築、時系列分析、プログラム論理モデル、そしてクロスケース統合があります。以下では、在宅勤務制度の導入を題材にして、それぞれの戦略を具体的に説明いたします。

パターン適合

あらかじめ立てた予測と実際の観察結果を照合する方法です。たとえば実地調査以前に文献から「在宅勤務を導入すれば生産性が向上する」という命題を立て、観察データと比較します。もし導入後に処理件数が増加し、顧客対応スピードも改善していれば仮説は支持されます。逆に、生産性が低下した場合には「在宅勤務ではサボる人が増える」という対抗仮説のほうが妥当であるかもしれません。こうした検証を通じて、施策に関する理論的予測と実証的事実を結びつけることが可能となります。実際の観察結果を前述したクラフトライバルとリアルワールドライバルとを比較するのが有効です。

説明構築

説明構築とは、観察された現象について「なぜそのような結果になったのか」を段階的に説明していく方法です。簡単に言えば、「結果の背後にある仕組みや原因を一つずつたどる」作業です。

在宅勤務の導入効果を例にするとわかりやすくなります。まず、企業が在宅勤務を導入した結果、生産性が上がったとしましょう。ここで、単に「在宅勤務をしたら生産性が上がった」とだけ書くのではなく、なぜそのような結果になったのかを順を追って説明します。例えば：

在宅勤務によって社員が通勤する必要がなくなると、時間的・心理的な余裕が生まれる。この余裕が、疲労やストレスの軽減につながり、集中力やモチベーションの向上をもたらす。さらに、職場での中断（同僚からの雑談やランチ・コーヒーの誘い）が物理的に減ることも、集

表2：異なる種類の対抗説明

クラフトライバル	
帰無仮説 (Null Hypothesis)	観察結果は偶然の産物にすぎないとする説明。
妥当性への脅威 (Threats to Validity)	歴史的変化、成熟 (maturation)、不安定性、テストや測定手法の変更、回帰、サンプルの選択、実験参加者の脱落、選択と成熟の相互作用など。
調査者のバイアス (Investigator Bias)	実験者効果や、フィールドリサーチにおけるリフレクティビティ（研究者自身の存在や関与がデータに影響すること）。
リアルワールドライバル	
直接ライバル (Direct Rival)	想定していた要因ではなく、別の要因が結果を説明する場合。 例：社員の生産性向上が「賞与の大幅増額」の効果だと思っていたが、実際には「新しいITツール導入」が原因だった。
混在ライバル (Commingle Rival)	複数の要因が同時に結果に影響している場合。 例：業績改善が「新しい営業研修」だけでなく、「新しい販売促進キャンペーン」の影響も同時に受けていた。
実施ライバル (Implementation Rival)	施策そのものではなく、実施プロセスや運用方法が結果を説明する場合。 例：改善提案制度の成果は、報酬の額ではなく「優秀な現場リーダーの存在」によってもたらされていた。
対抗理論 (Rival Theory)	想定していた理論とは異なる理論が、より適切に結果を説明できる場合。 例：従業員満足度の向上が「自己決定理論」ではなく、「公平理論」によって説明できる方が妥当だった。
圧倒的要因ライバル (Super Rival)	個別の介入よりも大きな外部要因が結果を説明する場合。 例：売上増加が「新商品の投入」ではなく、「為替レート的大幅な変動」という外部要因によるものだった。
社会的ライバル (Societal Rival)	社会全体の流れや時代の変化が結果を説明する場合。 例：オーガニック食品の売上増が「店舗マーケティング施策」の成果ではなく、「健康志向ブーム」という社会的潮流の影響だった。

Yin (2018, p. 173) Figure 5.1 “Brief Descriptions of Different Kins of Rival Explanations” を和訳し一部筆者が加筆・修正

中力を持続させる要因として働く。最終的に、これら複数の中間要因を通じて、生産性が向上する。

ここでポイントなのは、在宅勤務そのものが成果を直接生むのではなく、中間要因を介して生産性向上に寄与している点です。さらに深く調査すると、自由度の高い働き方が可能になることで、会社やチームへの帰属意識も高まり、成果に寄与することがあります。集中力の向上、ストレスの軽減、仕事満足増加といった複数の要因が相互作用し、生産性を高めるという構造です。

このように、説明構築では結果を単独の事象として捉えるのではなく、段階的に因果メカニズムをたどることで、「なぜそうなったのか」を論理的に整理していきます。ケース・スタディでは、このプロセスを丁寧に行うことで、成果の背後にある仕組みを明らかにできるのです。

時系列分析

時間の流れに沿って施策の効果を観察する方法です。在宅勤務を導入した企業を例にすると、導入直後の三か月間は生産性が大きく上昇するかもしれませんが、しかし半年後には効果が横ばいになり、一年後にはチームワークの低下が影響してやや低下するという変化が見られる可能性があります。このように時系列でデータを追うことによって、施策の効果が一時的なものか、あるいは長期的に持続するものかを判断できるのです。さらに、時系列に沿って現象を並べて観察することで、単なる相関ではなく因果関係を明らかにできる場合があります。たとえば、在宅勤務を導入した企業で一定期間後に「生産性が低下した」という結果が見られたとします。このとき、単に生産性の数字だけを見て「在宅勤務の導入が悪影響を与えた」と結論づけることはできません。時系列データを分析することで、導入直後は生産性が上がっていたが、その後チーム間のコミュニケーション不足や情報共有の遅れが徐々に生産性低下を招いたことがわかるかもしれません。このように、効果の変化を時間軸で追うことで、制度導入自体による影響と、その後の組織文化や運用プロセスの変化による影響を切り分ける手掛かりになります。このように、定性研究法は単なる「効果の有無」を測るだけでなく、施策がどのようなメカニズムで成果を生み出すかの「因果関係」を詳細に解明できる点で、クロスセクショナルな定量調査を補完する重要な役割を果たします。

プログラム論理モデル

施策から成果に至るまでの因果経路を論理的に図式化し、その妥当性を検証する方法があります。例えば在宅勤務制度を例にすると、「導入 → 通勤ストレスの減少 → ワークライフバランスの改善 → モチベーションの上昇 → 生産性の向上」という因果の流れを、コードやカテゴリーを入れた箱と、それらを矢印でつなぐことで図示します。説明構築や時系列分析では文章を用いて因果関係を説明しますが、それらを組み合わせて図式化することで、より体系的かつ抽象的に理解することが可能になります。プログラム論理モデルはもともと政策評価や社会プログラムの実践分野で発展してきた枠組みであり、Yinがケース・スタディ研究に取り入れたのも、施策や介入がどのような仕組みで成果につながるかを事前に整理し、評価設計や計画段階で活用できる点にあります。Yin自身は社会政策系の学術的背景を持ち、コンサルティング活動も行っているため、論理モデルは実務的・政策的なフレームワークとして提示されています。

私たちが経営学の分野でこの枠組みを活用する場合、図式化はコードやカテゴリーの整理だけでなく、Miles and Huberman (1994) が指摘するように、個別のカテゴリーや事象に意識が集中しやすい文章だけの説明では捉えにくい、現象全体のパターンや主要テーマを俯瞰的に把握することができます。また図式化は抽象度を高め、関係性の強調や複雑なパターンの抽出、命題の形成に役立ちます。そしてその命題はより大規模なサンプルや量的データを用いた実証研究で妥当性を検証するための橋渡しをすることが可能となります。

クロスケース統合

クロスケース統合とは、複数の事例を比較して相違点を抽出する方法です。この手法を用いることで、個別事例にとどまらず、より一般化可能な知見を導き出すことができます。

たとえば、同じ産業・業態で在宅勤務を導入している架空のA、B、C、D社を比較してみましょう。A社とB社は、いずれも成果重視型マネジメント（社員に一定の裁量を与え、業務目標の達成度を重視するスタイル）を採用しています。在宅勤務導入後、A社では生産性が約20%向上し、B社でも同様に業務効率の改善が見られました。これにより、成果重視型マネジメントでは在宅勤務の効果が安定して得られる可能性が示唆されます。

一方、C社とD社は、プロセス管理型マネジメント（作業手順や進捗管理を厳格に行い、社員の自由度を制限するスタイル）を維持しています。在宅勤務導入後、C社ではコミュニケーション不足や進捗管理の煩雑さが影響して生産性が低下し、D社でも同様の傾向が見られました。このことから、プロセス管理型マネジメントでは在宅勤務が必ずしも効果的でない可能性が示されます。AB社とCD社をそれぞれ同じマネジメントスタイルでグループ化することで、AB社間、CD社間で追試可能な構造が作れます。また、AB社は成果重視型、CD社はプロセス管理型とラベル付けすることで、各スタイルに応じた成功条件や失敗条件をより明確に比較・分析することが可能です。

社名	マネジメント	生産性
A社	成果重視型	高い
B社	成果重視型	高い
C社	プロセス管理型	低い
D社	プロセス管理型	低い

現実には、マネジメントスタイルだけで成果を説明できるほど単純ではなく、複数の変数が影響することが多くあります。たとえば、A社とB社はどちらも生産性が向上しましたが、A社は年間で20%、B社は10%の向上にとどまったとします。この差を分析すると、A社は在宅勤務前に対面での業務経験があり、チームメンバーとの密なコミュニケーションが行われていたことがわかりました。一方、B社は最初から在宅勤務でチームメンバーとは一度も対面で顔を合わせていませんでした。同様に、C社とD社を比較すると、C社は以前対面で業務を行っていたのに対し、D社はそうではなかったことがわかります。この分析により、新たな変数として「対面経験の有無（より掘り下げると信頼関係の程度）」の重要性が明らかになります。結果を整理すると以下の通りです。

社名	マネジメント	対面経験	生産性
A社	成果重視型	ある	高い
B社	成果重視型	ない	やや高い
C社	プロセス管理型	ある	やや低い
D社	プロセス管理型	ない	低い

このように、クロスケース統合を通じて、単一の変数だけでは捉えきれない成果の差異を把握し、複数の要因がどのように組み合わせさって効果を生むかを分析することが可能になります。これにより、個別事例の知見を一般化し、理論構築への示唆が得られます。

4. データ分析：グラウンデッドセオリーアプローチとYinのアプローチの比較

さて、ここからはデータ分析についてグラウンデッドセオリーアプローチとYinとを比較していきます。

4.1 理論生成と命題検証の違い

Glaser and Strauss (1967) が提案したグラウンデッド・セオリーの方法論は、研究開始時に仮説を立てず、データの収集と分析を反復することを通じてカテゴリーや理論を生成していく点に特徴があります。研究者はコーディング作業を重ねながら新しい概念を抽出し、それらの関連を整理して理論化を進めます。したがって、このアプローチはデータ主導の理論構築を重視しているといえます。

一方、Yin (2018) のアプローチは、既存理論を踏まえて予備的な理論や命題を設定し、その検証のためにデータを収集・分析する傾向があります。つまり、理論検証的な側面が強いのです。ただし、Yin もデータから新しい理論や知見が生まれる可能性を否定しているわけではなく、その重要性についても言及していますが、強調点は検証に置かれています。

4.2 重点の違い

Glaser and Strauss は、オープンコーディングから理論的コーディングに至るまでの詳細な手順を提示し、質的研究における分析技法の基盤を築きました。彼らの方法論は「データをどのように扱い、理論に結びつけるか」という手続きを具体的に示している点に特色があります。これに対して、Yin のケーススタディ・アプローチでは、コーディングの詳細な方法についてはほとんど触れられていません。その代わりに、研究デザインの設計や証拠の収集、信頼性や妥当性の確保といった研究全体の構築に重点が置かれています。そのため、「データをどのように分析するか」よりも「研究をどのように組み立て、説得力のある成果を提示するか」に関心が向けられています。

こうしてみると両者のアプローチは対比的に論じられることが多いですが、データの分析に関してという点と必ずしも対立するものではありません。グラウンデッド・セオリーはデータから理論を産出するための具体的な手順を提供し、Yin のケース・スタディはライバル理論などの研究デザインや分析戦略の観点から補完的な視点を提供しています。したがって、両者を

組み合わせて理解することで、質的研究におけるデータ分析の理解はより幅広く、深まっていくはずです。

5. 終わりに

今回は、「データ分析」に焦点をあててグラウンデッドセオリーアプローチとYinのアプローチを紹介・比較を行いました。次回は、実地調査をいつ終えるのか、つまりケース・スタディにおけるケースの数はどれくらい必要なのかということについてグラウンデッドセオリーアプローチとYinのアプローチの解説、比較を行っていきます。

参 考 文 献

- Glaser, B. G., and Strauss, A. L. (1967), *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Aldine, Chicago, IL.
- Miles, M. B., and Huberman, A. M. (1994), *Qualitative Data Analysis: An Expanded Sourcebook*, Sage, Thousand Oaks, CA.
- Yin, R. K. (2018), *Case Study Research and Applications: Design and Methods*, Sage publications, Thousand Oaks, CA.

〔よこざわ こうどう 横浜国立大学大学院国際社会科学研究院教授〕

〔2025年9月26日受理〕

【森田洋先生追悼号への投稿に際して】

森田洋先生は2024年の年末に突然逝去された。直前の23日まで一緒にいたため、訃報に接したときには何かの間違いとしか受け止めることができなかった。

森田先生とは日越大学やIMPMを通じて同じチームで働く機会が多く、その過程で先生のお人柄を知ることになった。特にIMPMに対する思い入れは強く、「コラボレーション・マインドセット」というモジュールのテーマについて、協働の本当の意味を真摯に問い続け、我々にも繰り返し問いかけておられた。その熱意は世界各国から集まった社会人学生にも伝わり、学生に囲まれて嬉しそうにされていた姿が思い出される。

また、ロータスに乗り、ときにスーツ姿で来校された先生に「いつもおしゃれですね」と声をかけると、はにかみながら「いやいや」と否定された直後に、「ほんとうですか」と照れくさそうに微笑まれた表情が忘れられない。

森田先生の温かい人柄と、教育・研究に対する情熱は多くの学生や同僚に影響を与え続けてきた。研究と教育とを彼が好きだったロック歌手のライブとアルバムにたとえ一流はどちらも手を抜かないといっておられたとか。私は先生から学んだことを胸に、今後もその志を受け継ぎ、教育と研究に邁進していきたいと考えている。

森田先生のご功績に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。